

〔陪膳記〕一食にても又ははゆづけにても、口へたべはて候て、そのはしをせんに置候時は、如前おしきの中へ可入候哉、又せんのふちなどにもたせ候て置候事も候哉の事。

前のごとくせんの中へ入申候はしの入様にも少様體在之由に候、先手をうつぶけて持候て入候事はおもはしからず候、手をあふのけて持て入候が能よし申人あり、又主人貴人等の御前にて御相伴などの時の食のたべ様に色々心得在之由候。

〔貞丈雜記六飲食〕一本膳に山椒と燒鹽とを少おきて出す事、山椒は脾胃の氣をひらき食をす、むる物也、醫書にみえたり、又鹽は食の咽につまりたる時、少くいづめば、つまりたる食咽を通る物也、それゆへ山椒と鹽をおいて出すなり、人の元に行て食する時、山椒など取て食ふ事はあるまじき也、食咽につまりたらば、鹽はくひつむべし、山椒はむせるものなれば食ふべからず。

〔世俗立要集〕一ハシニテサカナクハザルヤウ

昔堀川右大臣顯房ノ御子息國信ノモトへ、カタタガヘノタメニワタラレタルニ、御料ヲマイラセタルニ、ハシヲスエテ、汁ヲ御料モナラヌニヨリテス、メ申ニ、御返事ニ、サカナナヲバコソ、テニテハナラメト御返アリト、記録ニミヘタリ、

〔嬉遊笑覽十飲食〕式作法の外に物くふに心がくべき事あり、雖知苦庵道三養生物語に、四條繩手にて正行が敵に後ろを射させながら、まづかに竹葉タケハをつかふと云こと、天晴なる勇將とおもへり、梅窓曰、そういやるで思ひ出した木村が上方勢をおつ立たいきほひより、討死の時、大手の前にて敵の方へ尻を向け、牀几に腰をかけて、手の者五六人まんまるにして、大佛餅を手に手に持しづかに食ていた、その體ことの外見事にあつた、雨のふるやうな矢玉の中でのことじや云々、不斷まづかに物を食ならはねば、いそがしき時落つて食れぬものじや、食物が脾胃へおさまらず、首のまはりにある物じやといへり、こは英雄の振舞なれど、併しながら又ならひにもよるな